

プレゼンテーションとディベートの方法に関する諸問題

— 日本におけるコミュニケーションのありかたとその文化的背景 —

服 部 裕

A Study on the Cultural Background of Communication Problems in Japan

Hiroshi HATTORI

Abstract

It's a fact that Japanese have a different way to communicate with each other from Europeans who express themselves by word of mouth directly. Japanese think that they are enough able to communicate with each other, but from the viewpoint of western people it's not enough evident how they express themselves. Japanese people don't have any strong intention to express themselves, nor to communicate with others in direct words. This fact depends on the cultural background of the Japanese history and society. In the Japanese society of today, the Individualism which the complete communication is based on is not yet grown up completely. In this meaning the communication problem of Japanese gives a evidence that the essence of the Japanese society consists still in the community structure.

はじめに

コミュニケーションには、日常なおしゃべりから論文の作成まで様々な形式がある。人間が社会で生きて行く際、自分以外の人間と交わす情報交換の形式はすべてコミュニケーションである。基本的には、どんな形式のものでコミュニケーションと呼べるものはみな、情報発信者が自分の考えていることを言語としての記号やそれ以外の記号（身振りやモルルス信号等）によって表現し、自分以外の者（情報受信者）に伝達するという形態から成り立っている。つまり伝達手段としての記号をもっていけば、原則的には誰でも同じように支障なくコミュニケーションを営めるはずである。しかし、現実には話はそう簡単ではない。人間は何か伝えたいものがあったとしても、さまざまな制約のために思ったとおりのこと、あるいは感じたとおりのことを他者に伝達できないことがある。例えば、恋するひとに自分の思いを面と向かって伝えることの難しさを、多くの人は知っているはずである。思い、感じそして伝えたいことはただ一つ「君のことが大好きだ」ということであるが、こんな明快なメッセージが言葉にならないことを、誰でも一度くらい体験しているはずである。この場合、コミュニケーションを阻害しているのは、「恥ずかしい」とか「相手は自分のこ

となど好きでないかもしれない」という不安感などの心理的要因が大半であろう。コミュニケーションは、生きているひとりの人間から他の人間への「思考」や「感覚」といった抽象物の移動、あるいは譲与である。⁽¹⁾「生きている人間」と「抽象物」というこの2つの要素のために、コミュニケーションにはさまざまなファクターが関わってくる。つまり、生きた人間には「心理的要素」、「言語能力的要素」、「文化環境的要素」、「健康的要素」、「遺伝的要素」、「性格的要素」、「状況的要素」等々、人間に関わる考えうるかぎりの多種多様な要素が複雑に影響し、さらにやり取りされるものの抽象性が生み出す「意味の問題」や「解釈の問題」が問題を一層複雑にする。だから人間は言いたいことがあっても、いつもコミュニケーションを営めるとは限らないのである。

日本人はこのコミュニケーション行為があまり得意ではない。少なくとも欧米諸国の人々からはそのように見られている。「日本人は何を考えているかわからない。」「日本人はひとりひとりの顔がよく見えない。」そのような日本人についてのコメントは、日本が経済的に世界進出を果たした80年代以降よく耳にするところだ。「余計なお世話だ。日本人は神武以来このスタイルでお互いに十分なコミュニケーションを取ってきた。」というような声が聞こえてきそうである。確かにそのとおりのかもしれない。ただしそれは、日本人が、日本のなかで、伝統的

な日本の社会状況のなかで、日本人とだけコミュニケーションを営む場合だけに妥当性をもつ。しかし現実には、現在の日本社会および日本人をとりまく状況は、これとは根本的に相違している。多くの日本人が諸外国に出かけていき、また諸外国の多くの人々が日本にやってくるという事実だけでなく、日本社会の構造（制度）そのものが欧米型近代社会になってしまっている事実をわれわれ日本人は認めなければならない。日本人同士の社会的諸関係は、少なくとも制度的には西欧からとりいれた法制度に支えられている。だから時として、日本人同士でも議論をする必要性が生ずるのだし、相手が日本人でなければなおさらのことである。つまり、こちらの考えていることを相手に明快に伝える必要などない、などとは一切言えない状況に近代日本は置かれているのである。

ではわれわれはコミュニケーション、特に自己表現としてのプレゼンテーションやディベートにおいて、一体どのような問題を抱え、どのようにしたらそれを少しでも解消できるのであるか。以下本稿ではまず、日本人が言葉を介したコミュニケーションに関してもっている諸問題の背景を探り、その後で具体的に口頭による自己表現の方法について検討する。

コミュニケーションの基本的性格

例えば欧米諸国と日本のコミュニケーションのあり方を比較すれば、そこに本質的な違いがあることは誰の目にも明らかである。では一体その違いは何に由来しているのだろうか。すでに上で述べたように、コミュニケーションの主体は人間であるから、人間が持つさまざまなファクターがコミュニケーションの形態を規定している。しかしそれらのファクターのなかには、個人間の差異に作用するものもあれば、個人的差異を抱擁しながらもある一定の地域に共通したコミュニケーションの形態を決定している要素もある。日本と西欧などという大きな地域間の違いをみる場合、個人に直接作用する心理的要素や遺伝的要素以前に、地域全体に作用する広い意味での文化的要素を対象にし、その違いを検証する必要がある。長い歴史のなかで培われてきた文化環境が、その地域の人間のコミュニケーションのあり方に及ぼす影響は根源的な役割を果たしているはずである。

「不言実行」、「沈黙は金…」、「男はだまって…」といった格言や諺は必ずしも日本固有のものでないにしても、日本人の考え方をよく表している。日本では一般的に、「沈黙の美德」とでも呼べるような倫理観が定着しているといってよい。つまり言葉を尽くした自己表現や、それを前提にしたコミュニケーションは不必要、場合によっては排除されるべきものという考え方がある。「出る

杭は打たれる」という場合、「出る杭」とは自己主張している者であるが、厳密にいうと言葉を尽くして自己主張している者を意味している。例えば、威風堂々とした沈黙による日本的自己主張は、決して「出る杭」にはならない。つまり自己主張そのものが悪いわけではなく、そのやり方に倫理的価値判断が下されるわけだ。

では何故、日本ではしゃべることはいけないこととされてきたのだろうか。それを知る手掛かりとして、まずコミュニケーションとは一体どのような行為であり、どのような意味もっているのかを考えてみよう。

まず最初の設問。社会的生活を営んでいる人間にとって、話すことおよびコミュニケーションは不可欠な行為であろうか。答えはノーである。話すという行為そのものは生物学的に人間に与えられた能力であるが、それを行使するかどうかは社会的および心理的必要性に関わりたいわば社会心理学的行為である。特に、スーパーマーケットや自動販売機、それにパソコンなど電子媒体による情報交換システムなどを備えた現代社会では、本人が話したくなければ一日でも二日でも話す必要はない。

二つ目の設問。それでは何故人は話すのか。話すという行為は、原則として自分が話していることを自分以外の誰かが聞いている、ということをも前提とする。つまり、コミュニケーションである。度を越した独り言や、誰も聞いていないのにしゃべり続ける人が奇異に見えるのはそのためである。話す行為、つまりコミュニケーションは、「われわれが日常生活（家庭生活はその一部）を共有し、これを基盤とも背景ともして初めて意味がある」⁽²⁾。換言すれば、発話行為は他者の存在を認め、自分の存在を認めさせる行為である。

三つ目の設問。それでは、他者を認め、自分を認めさせるとはどういうことなのだろうか。これは、コミュニケーションが成立するためには、発話者と聞き手の両者が同じ基盤（例えば共通の言語）を共有することを前提としたうえで、両者が物質的にも精神的にも異なる人間であることが不可欠である。相手が自分とは異なる人間であるからこそ、相手に向かって話す必要と意味が生ずるのだ。つまり、話さないと自分が何を、どう考えているのか分かってもらえない自分とは異なる人間だから、私はその相手に語りかけ、逆に相手の考えていることが分からないから、相手の語りかけに耳を傾けるのである。日本人がよく言う「以心伝心」が事実なら、言葉によるコミュニケーションは不必要となるはずだ。[[「・・・」君の『こころ』のことがわたしに透明に見えていれば、君にとってわたしに語る必要がない。]⁽³⁾他者が自分とは異なる考えをもつ一個の自立した主体であるという認識を前提としないかぎり、コミュニケーション（他者に知らないことを伝達する行為）はまったく不必要なもので

ある。

四つ目の設問。円滑なコミュニケーション成立の前提には、共有基盤としての共通言語が必要であるが、共通の言葉は誰が発話しようが、つねに同じ意味しかもたないのだろうか。これもノーである。話し手（書き手）は語りかける相手が理解可能な共通の言葉を使うわけだが、それぞれの言葉は共通の意味の枠をはみだす可能性をもっている。同じ言葉を発話しても、話し手はそこに他者とは違う意味を付与することができる。つまり、すべての発話者は許容範囲内でそれぞれ「独自の意味」を生みだすことが可能である。その許容範囲は多分、日常的なコミュニケーションにおいては比較的狭く、芸術的コミュニケーションの場合はかなり広がることもあるだろう。いずれにしても、互いに共通の言葉を使っても、そのつどどんな新しい意味やニュアンスをもった言葉が発せられるか分からないから、コミュニケーションはいつも新鮮である可能性をもっている。だから、誰でもが他者とは取り替えがきかない「独自で自由な言語主体」⁽⁴⁾であるといえる。

以上、簡単にコミュニケーションの最も重要な性格を概観した。以下、コミュニケーションのこうした性格が、日本の文化状況のなかでどのような制約を受けてきたかを見てみたい。

日本におけるコミュニケーションの問題

すでに前章で、日本では話すことはあまり良いことではないと考えられているということを書いた。ここでは、それはコミュニケーションの本質との関係で、具体的にどのような文化的背景をもっているかを考えてみたい。

コミュニケーションの前提をもう一度まとめると、人間は互いに異なる人間同士であり、互いに「独自で自由な言語主体」であるということ、それを互いに認めあうということである。これをもっと簡単に言ってしまうと、人間はみな違った個人であり、それぞれ自立した主体として自己表現する権利を有しているということである。コミュニケーションのこの原則はどの時代でも、どの地域でも同じように保障されていたわけではない。結論から言うと、これは近代ヨーロッパの個人主義の発展と共に勝ち取られてきた原則である。個人それぞれが質的に独立した人格であるということ、つまりすべての人間の人格が認められてはじめて、誰でも同じように発言することが許されるようになったのだ。ヨーロッパにおいては個人と個人の結びつき（契約）によって社会が形成されるという近代社会の考え方の裏に、各人が同じように発言する権利をもつとともに、他者の発言を認めるという考え方が存在した。欧米の人々が、自己主張はま

ずとにかく言葉によって行なうという習慣は、個人の結びつきをベースにした近代社会では当然の帰結なのである。

一方日本では、近代化以後でも上記のような個人間の契約によって社会が成立するという個人主義的な考え方は生まれず、個人は自分が所属する組織の平和と繁栄のために尽くすという、家産制国家体制および封建体制時代からある考え方が存続した。つまり近代日本の社会は、制度的には徐々に法制度を基盤にした「近代社会」の体裁を整えてきたが、生活現場の実態は未だに非＝個人主義的な共同体社会の性格を色濃くもっている。⁽⁵⁾ 個人主義の未成熟のために、各個人が異なった考え方をもっているというコミュニケーションの前提（上記設問3）が、理屈では分かっているとしても生活実感としては認識しきれていないのである。各種の決定は必ずしも個人的意見をぶつかり合わせた議論の末、責任の所在を明らかにした形で下されるのではなく、「個人的意見」は非人称の「みんな」がそう思っているからという形で集約され、なるべく責任の所在を曖昧にしたまま下されることが、今なお頻繁に行なわれている。つまり現在でも、日本の共同体的社会においては、同じ共同体の成員である個人は共同体の利益を守るという根本の部分で同質性を求められている。そのため、そもそも自分とは異質な個人を前提とした真のコミュニケーションは成立しえないのである。

国会においてさえ同様である。本来であれば英国議会のように、与党と野党が異なった意見をぶつけ合うディベートをとおして政策決定するのが国会であるが、日本の場合は法案提出者（多くの場合は政府）に対して他陣営が質問するだけである。その質問内容も予め相手方に文書で提出してあるため、答弁者はただいかに質問をかわすかということだけに腐心し、実質的な政策議論など起こりようがない。英国議会の議員たちは自分を支持している有権者個人の代弁者として、議会のディベートに参加する。そこには市民ひとりひとりが、自分たちの社会について意見を述べる権利を等しく有しているという、個人に基づく近代社会の理念が反映しているのである。

個人と個人の結びつきとしての社会とは違い、集団の利害が個人に先行する共同体においては、共同体の和を維持することが最終的な目標であるため、個人間の衝突はなるべく避ける方向に規制が加えられる。つまり実質的な論議は禁忌となる。共同体的論議のなかに時折出現する明快な意見の持ち主は、予め見通されている「玉虫色の決着」に沿わない場合は異端として排除されることが多い。上で述べた「出る杭は打たれる」である。またそれは、発言者の地位や身分や年齢といった社会的要素にも影響される。発言の反映のされ方に、ヒエラルキー

的性格が付与されるわけである。このような文化的土壌をもった社会で、個々の人間が自由に自分の考えを発言し、他者にも同様の機会を与えるという習慣が自発的に生まれるはずはない。

このように、日本人がコミュニケーション行為、特に人の前で自分の考えを明快に述べるプレゼンテーションと、一定のルールに則って互いに異なる考え方をぶつけ合うディベートが不得意であるという事実の背後には、上記のような文化的環境の作用が強く働いていると考えられる。しかし「はじめに」で述べたように、現在の日本人は国際社会はもとより日本国内においても、確かなコミュニケーション能力が求められている。これなしでは日本の未来はない、と言っても過言ではない。ところが日本人のコミュニケーション能力は、日本社会が今後ますます諸外国との交流を進めても、その基底的文化状況が根本的に変化しないかぎり、自発的に発達することはないであろう。今われわれに求められているのは、まず学習をとおして言葉による自己表現能力を培うことであり、日本社会のどこでもコミュニケーション能力を発揮することが可能な社会環境をつくりだすことである。東京大学の教養課程の教科書として編まれた『知の技法』のなかで、「表現の技術」として懇切丁寧にコミュニケーションの技法が解説されている事実は、これまで述べてきた日本人のコミュニケーション能力欠如の現状を象徴しているといえる。

プレゼンテーションとディベートの方法

本章では、プレゼンテーションやディベートを行なう際に留意しなければならない方法や心構えについて、具体的に述べてみよう。

まずは、口頭発表に関する学生の現状を見てみよう。筆者が担当する比較文化論の授業は、受講学生が予め与えられたテーマについて口頭発表する形式をとっている。そのうえで、まず用語や事実関係など発表内容に関する具体的な質問を行ない、発表者の考えをなるべく正確に理解させる。発表内容を一応理解した後に、今度はそれについてより具体的に問題点を洗いだし、テーマに関するより深い理解を得るためにディスカッションをさせる。そして最後に、まとめとして教官が解説を行なう。これがこの授業の一応の手順である。しかし現実には、この手順どおりに事は運ばない。口頭発表を聴き終わった学生から質問がでることはまずない。それではすべての事項を少なくとも言語的に理解したかという、もちろんそうではない。自由討論に関しても同様である。質問にしても、討論にしても教官が指名しないかぎり学生の発言は皆無に近い。結局、口頭発表の学生と教官との

やり取りが中心で、他の学生は教官の質問にときおり答えるだけで終わってしまう。これは、学生に質問や討論をするために十分な知識がないというだけのことではない。自分が理解できなかったことを質問することすらないからである。留学生の場合は、乏しい知識でも自分の意見や疑問を素直に表現することがしばしばあった。前章で述べた文化的背景の違いが、自己表現の欲求の違いとなって現われていると考えられる。

さて口頭の課題発表はすべての学生が行なうわけだが、共通しているのはその方法の不備である。とりあえず、内容の善し悪しは問わない。問題は発表の仕方そのものである。以下に、口頭発表とその後の討論で必ず必要とされる手順と心構えを示してみる。⁽⁶⁾

(1) 論点をはっきりさせる。

- ・準備段階で「前置き」、「本論」、「結論」を明確にしておく。
- ・「前置き」のなかで発表全体の見取りずを見せる。つまり発表全体の論点の要約と、どのような順序で話すかを伝える。
- ・ハンドアウト（要約）を作って、発表前に聞き手に配付しておく。ハンドアウトは要点のみを簡潔に書く。必要であれば視覚的資料（写真、図、グラフ、年表など）を載せる。

(2) 効果的な発表を心掛ける。

- ・分かりやすい言葉を使い、簡潔な文で聞き取りやすい話し方をする。
- ・発表する内容（話したいこと）と発表の順序をよく頭に入れておく。（ハンドアウトを利用）
- ・予め発表内容を文章化しておくが無駄な言葉を使わなくてすむが、文章を棒読みするのはよくない。口頭で話された文章語は理解しづらい。
- ・聞き手に語りかけるような発表をする。
- ・発表にどのくらいの時間がかかるか予め知っておく。（リハーサルが有効）できれば冒頭で予想される発表時間を聞き手に伝える。
- ・本論に複数の論点がある場合、論点毎にまとめたうえで質問を受ける。
- ・発表中の思いつきで、よく知らないことや準備不足のことを話さない。（論点がぼけるから）
- ・ハンドアウトを使い、どの論点について話しているかを聞き手に伝える。
- ・聞き手の反応等から、聞き手が理解できているかどうかに注意しながら発表する。

(3) 質疑応答では以下の点について留意する。

- ・発表者は必要ところで、必ず質問の有無を確かめる。

- ・質問したいときは必ず挙手をする。
 - ・分からなかったことは必ず質問する。
 - ・何を質問したいか最初にはっきりさせる。そのため、質問の要点をメモしておき、簡潔な文で質問する。
 - ・いくつ質問があるかを最初に言う。
 - ・質問に自分の意見を混ぜない。(意見は討論の場で述べる。)
 - ・発表者は質問されたことがよく分からなかったら、必ず質問の主旨を再度確認する。(勝手な解釈で応答するのは時間の無駄)
- (4) 討論では以下の点について留意する。
- ・発言を求めるために挙手をする。
 - ・何について述べるかを最初にはっきりさせる。質問の場合と同じようにメモを使い、簡潔な文で意見をまとめて発言する。
 - ・討論の際は、今討論されていること、あるいは密接に関連することだけを述べる。その論点がすんだら、新しい論点に関して発言を求める。
 - ・自分の意見の論拠を示す。(思いつきだけで勝手な結論を言わない。)
 - ・司会者および各自は議論がかみ合っているかどうかつねにチェックする。意見が対立し合うような内容でないのに、対立関係にあるものとして議論を進めたり、異なる論点について同時に議論しない。
 - ・並存できる意見は並存させる。(必ずしも議論には白黒つけられない、つける必要がないことがある。)
 - ・他の人の意見は最後まで聴く。そのうえで反論する。
 - ・意見の違いがあるからといって個人攻撃をしたり、発言を妨げたりしない。

以上、筆者自らの体験をとおして得た口頭発表と討論の方法に関する認識を簡単に述べたが、これ以外にも注意しなければならないことは多数あると思われる。また上記の注意点をすべて実行すること自体、筆者自身を含めてかなり難しいと思わざるをえないのも事実である。とはいえ、こうした方法論を意識化しないかぎり、効率もよく、質も高い口頭発表ならびに討論は可能にならないだろう。

おわりに

以上本稿では、日本におけるコミュニケーションの問題の文化的背景を明示したうえで、どのような方法によ

ってコミュニケーション能力を高めることが可能かを考えてきた。コミュニケーションの方法と能力は、その技術の習得によって身につけることは可能であるし、今後ますます日本人はそれを求められていくと考えられる。だが、どんなにコミュニケーションの方法論を身につけても、どのような社会的状況下でも言葉による自己表現を許容する社会環境が整わないかぎり、真のコミュニケーションは成立しない。そして、責任を伴う自己表現に裏づけられたコミュニケーションが成立しえないところに、すべての個人の人権を保障する社会はありえない。その意味でコミュニケーションの問題は、本質的には単なる技法の問題ではなく、社会を支えている文化の問題そのものであるといえる。しかし、だからといって正しい方法論を身につける意味がないということではない。つまりコミュニケーション技術の習得は、同じ日本人でもそれぞれ異質な個人同士が人権に基づいて互いに理解し合いながら共生しう社会を築くための必要条件なのだ。そして、この「個人と個人の共生」が、単に日本人同士の関係だけを意味しているのではないことは自明のことである。世界という国際社会において、日本人ひとりひとりが諸外国の人々と「相利共生」していくということ、日本において日本人同士が互いに異質な人格であるということ認め合う共生社会をつくりださなければならないということは、相関関係にあるからである。

日本における国際化が最も進んでいるビジネスの世界では、文字どおり異質な考え方をもつ他者との相互理解をえるために、すでに多大なコミュニケーション努力がはらわれているはずである。しかし企業人の努力だけでは、日本の没コミュニケーション的社会的の本質は変わらない。新しい世紀に向けて異質な他者との共存を目指すのであれば、現在日本人には技術的にも理念的にも真のコミュニケーションを可能とするような変革が求められている。

注

- (1) 池上嘉彦：『記号論への招待』、岩波新書、1989年、36頁
- (2) 山本巍：「言語とコミュニケーション」；竹内敏人編：『言語とコミュニケーション』所収、東京大学出版、1988年、2頁
- (3) 前掲書、3頁
- (4) 前掲書、4頁
- (5) 拙論参照：『近代ヨーロッパの本質と近代日本—個人主義の問題をめぐる—』秋田大学教育学部研究紀要(人文・社会学)第51集、1997年
- (6) 小林康夫/船曳建夫編：『知の技法』第3部参照、東京大学出版、1994年